【研究論文】

徳島県の盆棚

庄武憲子

一　はじめに

先祖を迎えまつる盆行事に、実際には三種の霊、先祖・新仏（前年の盆から当年の盆までの死者霊）・無縁仏（まつり手のない霊）がまつられていることはつとに言われつづけてきた。

柳田国男は『先祖の話』において、この三種の霊のまつりを認めた上で、先祖をまつるのが本来であって、まつられない何かに対しての意識があったこと(1)、また死穢の恐怖が我々の弱み[柳田　一九六九　九三]であったと指摘し、これらに外来の仏教が結びつき、盆に無縁仏をまつる、あるいは新仏をまつるという習俗が加わり、変化したものと説明した[柳田　一九六九　九三]。さらに、新たに変化したものである無縁仏や新仏のまつりが表面だっていることを警告し[柳田一九六九　九一～九四、九七]、先祖をまつるのが日本古来の信仰であることを強調した[柳田　一九六九　一〇八]。

柳田が解釈した盆にまつる三種の霊の位相については、その後多くの議論が積み重ねられてきた。その議論はおもに三つの方向から成されてきた。一つは、盆行事の本質を周辺諸国の類似例を視野に入れて検討するものである。二つ目は盂蘭盆会に関する史料によって、仏教の教義がどのように浸透したか、また三種の霊がまつられるようになった変遷過程をみるものである。三つ目は、三種の霊のまつり方、特にまつり場として設置される盆棚の各地様々な様式を比較検討することによって、三種の霊のまつられるに至った変遷過程を検討するものである。

その結果、一つ目の方向からは、盆行事の本質は先祖をまつることではなく、ひもじい霊の大群をして食い飽かせる儀礼、つまり施餓鬼であることが指摘されている[鈴木　一九八八　二八～八六]。

二つ目からは、盆に本来先祖をまつることはなく[田中　一九八六ａ　六八]、『仏説盂蘭盆経』に基づく寺院の盂蘭盆会の行事が、人々が末法を意識するようになった一〇世紀末から一一世紀を機に、新仏をはじめ、自分たちの知る死者が餓鬼道で苦しむのを助けるものとして人々に浸透したものであることが言われている[田中　一九八六ｂ　九七～一一七]。

三つ目からは、盆のまつりは、本来屋外で行われていたものが、仏壇と位牌が定着することによって屋内で行われるようになった変遷が言われている[最上　一九八八　一〇二][喜多村　一九八八　一六六][高谷　一九八八　一九五]。一方三種の霊の位相については、無縁仏または新仏の霊を

鎮めるために仏教が取り入れられ屋外でのまつりが起こった後、屋内での先祖まつりが盛んになって、無縁仏、新仏の祭りが屋内の先祖まつりに吸引されたとする説[最上　一九八八　一〇二]、屋外で何らかのまつりが行われていたのが、先祖と無縁という概念が取り入れられ、三種の霊のまつりに分化していったという説[喜多村　一九八八　一六六]、屋外での先祖のまつりが屋内に移っていく際に、屋外のまつり場に、無縁をまつるという説明がつけられたという説[高谷　一九八八　一九二]などに分かれている。

盆行事の本来は先祖まつりであったとする柳田の説がゆらいではいるものの、三種の霊の位相については不明瞭な点が残されており、研究の余地があると考える。

徳島県内で伝えられてきた盆棚に関する習俗は、三つ目の議論の方向の中で、無縁仏と新仏の祭りが霊を鎮める目的のもと屋外で共同で行われていたことを示す[最上　一九八八　九三、九九]、新仏と先祖のまつり方には区別がないこと、また先祖が本来外の棚でまつられていたことを示す[高谷　一九八八　一七六、一八〇]、先祖を祭るのは、戸外から家の中の仏壇に移ってきた変遷過程を示す[喜多村一九八八　一五六、一六一]などの事例として取り上げられてきた。徳島県内の盆棚の習俗が、先祖、無縁仏、新仏のまつり方について多様な変化を持っていることを予想させるものである。

県内の盆棚についての事例を整理し全体像を見直すことは盆にまつる三種の霊の位相を考える上で重要な手かがりになると考え、調査と資料収集を試みた。

以下県内の盆棚について屋外調査によって得た資料、合わせて市町村史誌から事例を抜き出し一覧にした資料を紹介し、見出せる三種の霊の位相についての考察を報告したい。

二　事例

末尾につけた**表1**と**写真1～5**は平成八年相生町、平成一一年穴吹町、平成一二年神山町で行った調査から得た情報をまとめたものである。また**表2**は県内五〇市町村それぞれについて、刊行されている一冊以上の市町村史誌をあたり、盆棚の事例を項目ごとに抜き出してまとめたものである。空欄については、該当する記述を見つけ出せなかったものである。

表1、**表2**をもとに徳島県の盆棚の事例をまつる対象ごとに区分し、その実態をみていくこととする。

（一）先祖をまつる対象とする事例

先祖(2)をまつる対象としていることがわかる事例は、**表1**事例番号a・b・fの三例、**表2**事例番号1・6・7・13・14・36・37・38・40・46・47・52・53・54・55・57・60・61・62・63・64・66・67・68・71・73・74・75・78・79の三〇例の合計三三例をみることができる。

つぎに三三例がどのような棚をまつり場にしているかを分類してみるとつぎのようになる。

①仏壇でまつる―五例（事例番号13・40・67・73・78）

②仏壇前に飾り付けをしてまつる―八例（事例番号b・f・1・14・38・52・66・75）

③床の間に位牌を移してまつる―八例（事例番号14・46・53・54・61・

62・68・74）

④屋内・屋外の中間（外縁、軒下）に棚を設置してまつる―四例（事例番号a・63・64・71）

⑤屋外に棚を設置してまつる―三例（事例番号6・7・61）

⑥設置した棚と屋内（仏壇・床の間）の二ヵ所でまつる―四例（事例番号36・37・47・57）

⑦設置場所は不明であるが棚でまつる―一例（事例番号60）

以上から、まず先祖をまつる常設のまつり場、仏壇があるにもかかわらず、別場所にまつり場を設ける例が多いことがわかる。また②に分類したように仏壇でまつる場合でも特別の飾り付けをする、⑥に分類したように仏壇だけではなく棚を設置し、二ヵ所でまつる例があることから、先祖をまつるにあたっては、盆ごとにまつり場、盆棚を設けてまつるのが本来であったと考える。続いてまつり場の位置についてみると、①、②、③に分類した事例数から屋内でまつるとする例が多い。一方で④屋内と屋外の境である縁側・軒下、⑤屋外、⑥二ヵ所でまつると分類できる例があり、まつる位置について決まりがない。この状況についてはすでに指摘されているように[喜多村　一九八八　一六六]、仏壇と位牌という先祖をまつるための明確な対象物が家の中に導入されたという要因があったことを考え合わせると、屋外に棚を設けてまつっていたものが、仏壇と位牌に吸引されて屋内でまつるという変化を起こした結果だと考える。

（二）新仏をまつる対象とする事例

新仏をまつる対象とする事例は、表1事例番号a・e・f、表2事例番号3・5・9・11・13・14・15・16・17・20・21・25・37・48・54・55・60・61・62・64・66の合計二五例である。これら新仏をまつる対象については先祖の場合とは異なって、すべての例が専用の棚を設けるとしている。そこで棚を設ける位置別に分類してみると以下のようになる。

①川、海などの水辺―九例（事例番号3・14・15・16・60・61・62・64・66）

②墓―七例（事例番号a・5・9・11・12・13・17）

③家の外庭―六例（事例番号e・f・15・37・54・55）

④墓と外庭の二ヵ所―一例（事例番号20）

⑤縁側―一例（事例番号21）

⑥堂―一例（事例番号15）

⑦位置不明―二例（25・48）

以上から徳島県内では先祖とは区別して新仏をまつり、そのまつり場は屋内ではなく屋外であるとしていることがいえよう。⑥に分類した事例番号15については氏子がお堂に集まって共同で新仏をまつり、この時同時に藩政時代に不遇で死んだ谷貞之丞なる人物の霊も一緒にまつるというもので、屋外をまつり場としている例と考える。

盆に先祖とは区別して新仏を屋外でまつるとする傾向は、柳田が指摘した「死穢への恐怖(3)」が理由であったと考える。

表1事例番号e穴吹町口山調子野では盆に新仏をまつるためにミズダナという棚をつくる。この棚には麦藁帽子を被せるとする（写真5参照）。事例番号f穴吹町穴吹岩手ではミズダナに被せる帽子は以前は箕笠をつるすものであったいい、葬式の際にもミズダナを作っていたという。e・fの事例は盆に新仏をまつる棚を、葬送儀礼の際につくられる「カリヤ」「ムイカダナ」と呼ばれるものと同じとしている例である。祖谷地方一帯でも盆

に新仏をまつる棚と葬送儀礼につくる「カリヤ」「ムイカダナ」を同じとする事例があることがすでに指摘されている[武田　一九五五　一〇一][近藤　一九八二　二三四]。徳島県内では、死日、あるいは死後六日目に「カリヤ」もしくは「ムイカダナ」と呼ばれるものをつくり、それに簑笠を使用する例が、東祖谷山村、西祖谷山村、池田町、木屋平村、神山町、穴吹町で報告されている[近藤　一九八二　二三〇～二三八]。カリヤは供物がなされまつられたのちに、川、谷、墓地に捨てられる。簑笠をつけることは死者の霊を表し、それを葬式後捨てにいくことは、死者の霊をすみやかに他界に送り出すためのものと考えられている[近藤　一九八二　二四六]。葬送儀礼のために設けるものと、盆に新仏をまつる棚を同じと考える例がみられることは、盆にまつる新仏についても葬式直後の死者の霊に対してへの感情と同様なもの、いわば「死穢への恐怖」を抱いていたことを示すと考える。他に「カリヤ」「ムイカダナ」などの習俗が報告されていない地域、表1事例番号54の那賀川町江野島では盆に棚をつくって新仏をまつることを「ムカワレ」（一周忌の意味）といって葬送儀礼と結びつけている例もみえ、盆の新仏には「死穢への恐怖」があったことを示すものだと考える。

（三）無縁仏をまつる対象とする事例

無縁仏(4)をまつるとしている例は、表1事例番号c・d、表2事例番号1・14・22・36・37・38・43・50・51・55・59・60・64・70・72・75・77・79の二〇例である。うち事例番号51・55・64では、まつる場所は設けず、無縁仏の供物をするというものである。また事例番号38・72・79は寺院での施餓鬼の行事である。事例番号72では家でも施餓鬼棚をつくるとしており、他一四例と合わせて一五例を、棚を設ける位置で分類すると以下のようになる。

①川・海などの水辺―五例（事例番号59・60・72・75・77）
②家の外庭―四例（事例番号c・d・14・37）
③墓―一例（事例番号1）
④軒―一例（事例番号43）
⑤位置不明―四例（事例番号22・36・50・70）

位置不明なものが多いので明確な判断はできないが新仏をまつる対象とする棚の位置と重なる傾向があると考える。

表1事例番号60の相生町の事例は新仏をまつる対象とした事例としても番号をあげた。ここでは、磧につくってある棚を三つに区切って大師と新仏と餓鬼仏をまつるとしている。

新仏と餓鬼仏を同様な位置でまつるにあたっては、新仏と無縁仏の性格が類似するという点(5)からも説明もある。しかし事例番号60は、指摘されているように(6)、新仏の供養に仏教行事の盆施餓鬼が明確に結びついていることを示すものと考える。寺院での盂蘭盆会は、自恣僧を供養することによって七世の父母および現在の父母の餓鬼道における苦しみが抜かれることを説く「仏説盂蘭盆経」に基づく行事だとされる[田中　一九八六b　九九][田中　一九八八　一二七]。また有徳の僧に供養することによって餓鬼道にあるものを救う施餓鬼会がのちに盂蘭盆会と密着し盆施餓鬼として一般寺院の年中行事でも重要な位置を占めてきたとされる[伊藤　一九八六　三九]。

事例番号60は一つの棚で新仏の死後の苦しみが抜かれるように大師（有徳の僧）と餓鬼仏に供物をするという仏教行事の盆施餓鬼会が行われていることを示すものではないだろうか。他にも新仏の供養に盆施餓鬼の行事

が結びついたことを明確に示す事例がある。

表1事例番号c・dの神山町左右内では盆につくる棚に紙に五如来を記した施餓鬼幡をつける（写真2・3・4参照）。棚に置く供物はガキボトケのために供えるという。

またガキボトケのために棚をつくるという。明らかに施餓鬼のための棚であるといえよう。一方でこの棚は新仏のある家が初盆から三年つくるものであるとしている。つまり新仏のために施餓鬼をしているのである。他に新仏のある家が施餓鬼棚を設ける（表1事例番号59・77）、または三界万霊をまつる（表1事例番号77）とする例もみられる。

このような状況から新仏と無縁仏を同様な位置でまつる、さらには盆に家には縁のない無縁仏をまつるというのは、新仏の供養のために仏教行事である盆施餓鬼を受け入れたことが少なからず影響していると考える。加えてなぜ新仏の供養に集中して盆施餓鬼が取り入れられたかを考えると、先述したように死者になってからの経過時間の少ない新仏について「死穢への恐怖」が強くあったからだと考える。

三　まとめ

徳島県内の盆棚の事例を見直した結果、特徴として盆の新仏のまつりと葬送儀礼との重なりが見られること、新仏の供養として仏教行事の盆施餓鬼会が結びついている事例がみられることがあげられる。この二点から、盆にまつる三種の霊のうち新仏と無縁仏の位相について、死者に対する「死穢への恐怖」があり、「死穢への恐怖」を強く感じる新仏のために仏教行事の盆施餓鬼会を行うことを取り入れ無縁仏のまつりを行うようになった流れがあったのではないかと述べてきた。柳田が『先祖の話』で想定していた盆行事への仏教の働きかけを示すものだと考える。

では、盆行事の中心である先祖のまつりの位置づけについてどうであったかについて加えさせてもらうと、事例からみて先祖をまつっていた位置が本来屋外であった可能性が高いことを考え合わせると、先祖ももともとは新仏と同様に「死穢への恐怖」を感じるものと考えられていたように考える。

例えば先祖をまつる際、表1事例番号66由岐町志和岐では仏壇の前に「仏の面匿し」という着物をつるしていたとし、事例番号75海南町川上でも仏の前に「仏さんの顔かくし」というトウモロコシの葉であんだものをつるしたとされている。これらの事例は仏壇や位牌が導入され、先祖が屋内でまつられるようになっても、やはり「死穢への恐怖」のあるものとして、霊を隔離したいという気持ちがあった表れではないだろうか。

盆棚についてのこれまでの研究では、先祖をまつる棚と新仏をまつる棚には区別がないとしている。その例証としてあげられているのは先祖をまつる棚の方に、「新たに世を去った人の喪の穢れを、すでに清まはつたみたまの祭に近づけまい」［柳田　一九六九　九三］、「十分に落ち着くにいたってないもの、何をしでかすかわからないもの」「世に禍をひきおこすのではないかと懸念される恐ろしいもの」［最上　一九八八　一〇一］などとして区別された新仏や無縁仏をまつる棚の形態の特徴と同様なものがあるというものである［青多村　一九八八　一四九］［高谷　一九八八　一七七］。この点からも盆において先祖と新仏、無縁仏は本来区別なくまつられており、屋内いいかえれば生者の世界には入ってきてほしくない、「死穢への恐怖」を生者に抱かせる、死者の霊として屋外でまつられていたと考える。

四　おわりに

史料から、寺院で行われていた盂蘭盆会の行事が、末法を機に、両親等の霊をまつる家々の行事として浸透していった過程は明確に示されている[田中　一九八六ｂ　九九][田中　一九八八　一二九]。また盆における霊供は初盆をきっかけに生者の知る死者の霊にまで対象を広げ行われるようになった過程が示され、ここにはまつり方に区別がないことから、本仏（先祖の霊）と新仏の性格に区別がないことがいわれている[田中一九八六ｂ　一〇一～一〇二]。盆行事は中国から伝来した「仏説盂蘭盆教」による講会が日本に定着したものと考える向きもある[田中　一九八六ａ　六二]。

しかし自恣僧もしくは有徳の僧に供物する行事であったものが、なぜ直接的に霊に供物をおこなう行事となったのかは判然としていない。また、民俗事例においては、盆に棚をつくって供物をするという要素が、重要な位置を占めているのは否定できない事実である。この点から、盆行事は「仏説盂蘭盆経」の教えを受け取ったのみで成立した行事ではなく、史料には表れない基盤があったと考えたい。その基盤は、県内の盆棚の事例の状況から「死穢への恐怖」に関係し、葬送の習俗にあったと予想する。今後、盆行事と葬送儀礼の詳細な比較を行うことによって姿が表れてくるのではないかと考える。

もう一つ、日本をふくめ周辺諸国に施餓鬼の行事が基層として認められることが指摘されている点について考えておかなければいけない。

日本における盂蘭盆会が、中国において、盂蘭盆会・施餓鬼会・水陸会（水辺に近いところに棲むという悪鬼精霊を供物をなげて宥めることに始まったとされる）が習合し、すでに変質したものを将来したとの考えがある[藤井　一九八〇　一三三][藤井　一九八八　二二]。

紹介したように、県内では盆棚を水辺に設置するという事例数が非常に多い。なぜまつり場を水辺に置くのか詳細に検討することで、予想した「死穢への恐れ」以外に周辺諸国との類似を説明できるような盆行事の基層の姿が表れてくるのではないかと考える(7)。

調査事例も少なく、問題点をまだまだ多く残すと考えるが、以上つかみうる徳島県の盆棚の実態として報告を終えたい。

注

(1) 祀と祭の違いを述べる上で、祀・ホカヒが「心ざす一座の神又は霊のみに、供御を進めるだけの式では無く、周囲になほ不定数の参加者、目に見えぬ均霑者というべきものを予期していたことが推測せられる」ものとし、「是が或は今日の盆の無縁仏、外精霊などといふ思想の基く所の別にも何かあったこと」と述べている[柳田　一九六九　八二]。

(2) 先祖、祖先の霊、位牌、仏をまつるという記述のあるものを取り上げた。精霊をまつるとしているものについては判断ができないので省いた。また仏壇をまつり場とする事例は先祖をまつると意識している

(3) 柳田は「新たに世を去った人の喪の穢れをすでに清まはったみたまの祭りに近づけまいとした心遣ひは今でも荒棚の構造の上に現れていて」といっている[柳田　一九六九　九三]。

(4) 無縁仏ほか餓鬼、餓鬼仏、施餓鬼、餓鬼道、三界万霊という表現のある事例をまとめて無縁仏とした。

(5) 最上は、「無縁仏・餓鬼仏は世に禍をひきおこすのではないかと懸念される恐ろしいもの」、「新仏は十分に落ち着くにいたってないもの、

何をしでかすかわからないもの」として、新仏がしばしば無縁同様に取り扱われるといっている[最上　一九八八　一〇一～一〇二]。また伊藤唯真は、『仏教と民俗宗教』(国書刊行会　一九八四年刊)の中で三種の霊を本仏と新仏・無縁仏の二系列にわけ、新仏・無縁仏に霊がきわめて不安定であるという類似性を指摘しているという[田中　一九八六b　九七]。

(6) 伊藤はとくに新精霊(新仏)に対して施餓鬼会が行われるという[伊藤　一九八六　三九]。田中は初盆にこそ盆施餓鬼の本来の姿をみることができるとしている[田中　一九九九　九三九]。筆者の不勉強のためどのような事例を例証としているのかが不明である。

(7) たとえば盆行事の中に水神祭祀の要素を見出す研究などがある[小野　一九八四　一七四～一八八][吉成　一九九一　三一～六六]。

参考文献

伊藤唯真　一九八六　「総説　四季の仏教行事と民俗信仰」　伊藤唯真編『仏教民俗学大系六　仏教年中行事』　名著出版　二九～九六

小野重朗　一九八四　「正月と盆」　宮田登他『日本民俗文化大系九　暦と祭事―日本人の季節感覚』　小学館　一二七～一八八

喜多村理子　一九八八　「盆に迎える霊についての再検討―先祖を祭る場所を通して」　大島建彦編『無縁仏』　岩崎美術社　一四四～一七二

近藤直也　一九八二　『祓いの構造』　創元社

鈴木満男　一九八八　「盆にくる霊」　大島建彦編　『無縁仏』　岩崎美術社　二八～八六

高谷重夫　一九八八　「餓鬼の棚」　大島建彦編『無縁仏』　岩崎美術社　一七三～二一八

武田明　一九五五　『祖谷山民俗誌』　古今書院

田中久夫　一九八六a　「平安時代の先祖祭祀」　田中久夫編『祖先祭祀の歴史と民俗』　弘文堂　四三～八二

田中久夫　一九八六b　「盂蘭盆会と無縁仏」　伊藤唯真編『仏教民俗学大系六　仏教年中行事』　名著出版　九七～一一七

田中久夫　一九八八　「盂蘭盆会・餓鬼神・田の神」　大島建彦編『無縁仏』　岩崎美術社　一二二～一四三

田中久夫　一九九九　「施餓鬼」　福田アジオ他編『日本民俗大辞典　上』　吉川弘文館　九三九

藤井正雄　一九八〇　「盂蘭盆と民俗」　五来重他編『講座日本の民俗宗教二　仏教民俗学』　弘文堂　一二一～一四二

藤井正雄　一九八八　「無縁仏考」　大島建彦編『無縁仏』　岩崎美術社

最上孝敬　一九八八　「盆の祭り」　大島建彦編『無縁仏』　岩崎美術社　八七～一〇三

柳田国男　一九六九　「先祖の話」　『定本柳田國男集一〇』　筑摩書房　三～一五二

吉成直樹　一九九一　「七夕・盆行事にみる水神祭祀としての性格」　『日本民俗学』一八七　三一～六六

(〒七七〇―八〇七〇　徳島市八万町向寺山　徳島県立博物館)

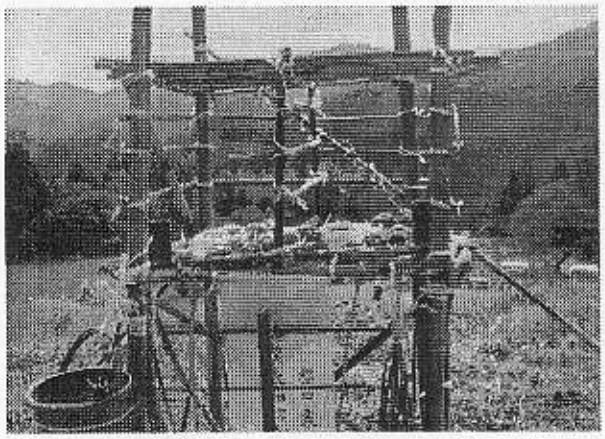

写真１　相生町横石　新仏をまつる棚

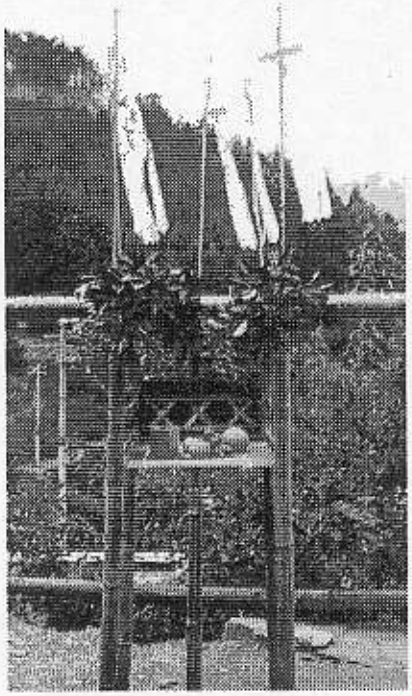

写真２　神山町左右内地中
ミズダナ

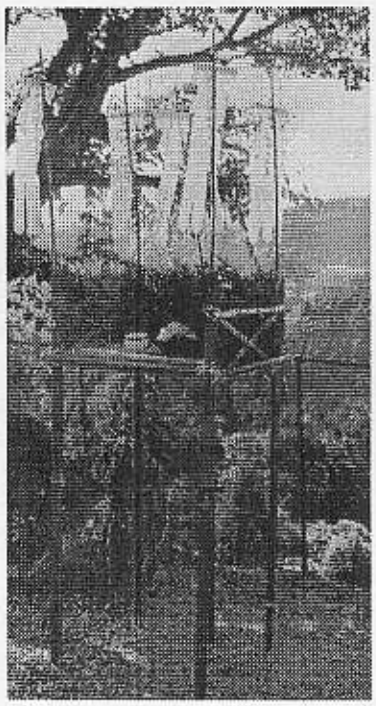

写真３　神山町左右内庄部
ミズダナ

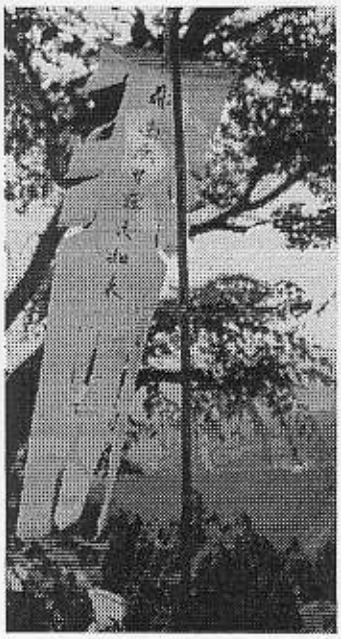

写真４　神山町左右内庄部
ミズダナにとりつけら
れた施餓鬼幡

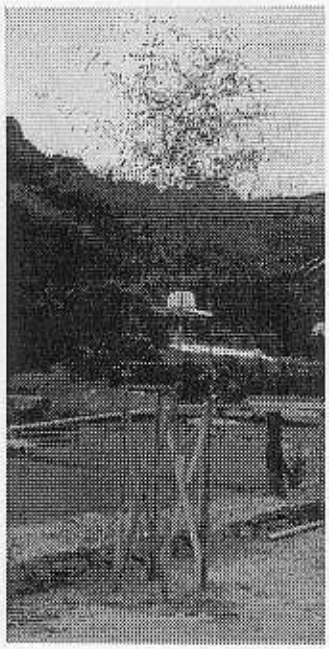

写真５　穴吹町口山調子野
ミズダナ

表１　県内の盆棚についての調査事例

番号	情報提供者の生年・性別	伝承地	まつる対象	まつる場所	棚の呼称	形態	まつり方
a	生年不明　男性	相生町横石	先祖	家屋の軒下	不明	四本柱の上部に箱がついた木材製の棚。	作っておいてある棚を毎年盆になると軒下に設置し、供物をして先祖をまつる。
			新仏	墓地	不明	青竹四本をたて、上方に割竹でつくった簀をとりつけて棚状にする。棚下正面には竹と縄でつくった梯子状のものをとりつける（写真１）。	新仏のある家では盆に棚を設ける。棚の下で火をともし、新仏の霊を迎える。棚には水、季節の果物などの供物をする。
b	大正７生　男性	相生町朝生	先祖	仏壇の前	ミズダナ	オナゴダケを２本たてて、先をくくる。２本の竹の両側に根引きの里芋とミズハギをくくりつける。	13日に仏壇前に位牌を全部前にだし、ミズダナをつくってまつり、14日にもとにもどす。供えたものは14日の夕方、川に流す。
c	生年不明　男性	神山町左右内地中	ガキボトケ	家の外庭	ミズダナ	青竹四本をたて、上方に割竹でつくった簀をとりつけて棚状にする。棚上部の三方は割竹を交叉させたものとヒノキの葉で囲む。また棚には紙に五如来を記した施餓鬼幡をつける（写真２）。	新仏のある家は初盆、二年目の盆、三年目の盆まで棚をつくる。８月７日に棚をつくる。供物は団子を供える。ガキボトケのために供えるという。
d	生年不明　男性	神山町左右内庄部	ガキボトケ	家の外庭	ミズダナ	青竹四本をたて、上方に割竹でつくった簀をとりつけて棚状にする。棚上部の三方は割竹を交叉させたものとヒノキの葉で囲む。また棚には紙に五如来を記した施餓鬼幡をつける（写真３・写真４）。	新仏のある家は初盆、二年目の盆、三年目の盆まで棚をつくる。８月７日に立てるものである。新仏をまつっているのでガキボトケがよってくる。そのガキボトケのために棚をつくると聞く。
e	生年不明　女性	穴吹町口山調子野	新仏	家の外庭	ミズダナ	四隅に葉のついたままの竹をさし、青竹を割ったもので棚をつくる。三方をヒノキの青葉で囲み、棚上部に麦藁帽子を被せる（写真５）。	8月14日に棚の上に甘酒を供える。新仏のある家では、新類があつまって墓前でヒトボシをする。ヒトボシをするものの形態は青竹に屋根形に組んだものである。
f	大正15年生　男性	穴吹町穴吹岩手	先祖	仏壇	不明	仏壇の前に苧殻（オガラ）を渡す。	仏壇の前に苧殻（オガラ）を渡し、そこに素麺の束、油揚げ、ナスビをつってお供えをしていた。
			新仏	家の外庭	ミズダナ	四隅に葉のついたままの竹をさし、青竹を割ったもので棚をつくる。三方をヒノキの青葉で囲み、棚上部に麦藁帽子を被せる（写真３）と同じであるが、被せる帽子は以前はタカラバチ（笠）を被せ、また棚に簀もつっていた。	棚の四隅に御飯を盛って供える。棚の真ん中には甘酒を供える。棚でまつるほかに14日の朝、家の前、もしくは墓前でヒタキを行う。ヒタキの時、サトイモの葉の上に賽の目に切ったナスビ、洗い米をのせたものと水をくんだバケツとシキビ１枝を用意しておく。ヒタキのときにバケツの水にシキビを浸し、枝についた水をヒタキの火とサトイモの葉の上の供物に振りかける。

表２　県内市町村史誌にみられる盆棚の事例

市町村名	事例番号	文献	伝承地名	まつる対象	まつる場所	呼称	形態	まつり方
山城町	1	山城町役場編　1960『山城谷村史』　山城町役場　p1522		先祖	仏壇前		仏壇前に細い竹を吊し、これに掛素麺と称する長い素麺をかけた（明治30年頃まで）。	14日朝多くは夕方に墓前で新仏と別に先祖代々の迎え火として篠目竹48本の火杖の中へたいまつ48束をいれて焚く。
				無縁仏	墓所の石垣	水棚もしくは火棚	若竹の細いものを編んだ棚か又は火杖の中から細い適当な竹を２本抜いて曲げて石垣などに差し込む。	棚の上へ梶の葉、里芋などの広い葉を敷いて米や茄子を切ったものや花や樒などを供えて水を注ぐ。木落ち滝落ち川流れおうけとり下され」と申しておがんでいる。
池田町	2	池田町史編纂委員会編　1983　『池田町史下巻』　徳島県三好郡池田町　P231から232	漆川		仏壇		仏壇に楮の葉をしき団子、素麺の束を左右一対供える。	七夕までに仏壇と墓の掃除などしたくをととのえる。仏壇は16日まで飾る。
					墓	火棚		ヒダナ（火棚）に里芋の葉を敷き、ナスの輪切り・コイモ（里芋）の根茎葉のついたものを供える。
	3	池田町史編纂委員会編　1983　『池田町史下巻』　徳島県三好郡池田町　P232	佐野	新仏	水辺		竹で組んだ棚	13日に棚の上にカジガラ（楮がら）とコエマツの10cmほどに切ったもの２、３本を49束になるようにし、火をつけて川辺で念仏を唱える。これをカワネンブツ（川念仏）という。一般の仏は14日に迎え火をたく。
	4	池田町史編纂委員会編　1983　『池田町史下巻』　徳島県三好郡池田町　P232	松尾		山の斜面	ヒダナ		その上に樫の葉を敷き、ナスビ・米・ダンゴ・ソーメンを供える。ソーメンを供えるのは、仏さんが団子をソーメンで背負って帰るためだという。さらに竹でタイマツと呼ばれるものを作り、墓か泉のそばに建て、火をともす。これらの後始末はその日すぐに焼き捨てて帰る場合と、次に墓参をするまでそのままにしておく場合があり一定していない。
西祖谷山村	5	喜多重昌・片山頼政・前川嘉吉編　1959『西祖谷山村史』　徳島県三好郡西祖谷山村役場　P488から489		新仏	墓地	火棚	２本の篠竹を前後に立てて各半円を作り、この上に薄（すすき）を並べて覆い、また篠竹の間に竹で棚を作ったものをこしらえる。	火をともす上に棚をつくり、玉蜀黍や里芋や果物や餅などを供える。また御米（おふま）を上げたり御水を上げたりする。その後、新仏に一同が参拝する。参拝し終った人には、当日持参して火棚に祭ったお供物の中、お餅を刃物で切って左の手でこれを参拝者に分配する。分配された人は、餅切れを食う真似をしてこれを棄てる習わしである。人が死亡すると３年間は火棚をつくった。
三好町	6	三好町史編集委員会編　1996　『三好町史　地域史民俗編』　徳島県三好郡三好町　P695		祖先の霊	庭先	盆棚	竹の先をわったものを四方に広げたもの	竹の上を四方に広げて里芋の葉をのせ、さいの目に切ったナスと米と水をまつる。この盆棚の脇で松葉を燃やし、迎え火を焚く。同時に墓のある方を向いて手を合わせ祖先の霊を迎える。

井川町	7	阿佐宇治郎編　1953『井内谷村誌』　徳島県三好郡井内谷村 P622		先祖	各家・谷の清浄な所		苧ガラ・槙	14日苧がら薪を持ち行き火を焚き米と茄子の五の目切り芋を供え、みずはぎに水をつけて先祖の戒名を唱え供物に注ぐ此れを仏を送るという。後墓参をなして帰る。
	8	西井治夫編　1982『井川町誌』　徳島県三好郡井川町井川町役場　P1315			墓もしくは川原	祭壇		団子・そうめん・茄子・里芋・米を供え、みずはぎに水をひたして　物にそそぐ。又この近くで緒がらを炊いて供養するものである。
東祖谷山村	9	徳島県三好郡東祖谷山村誌編集委員会編 1978　『東祖谷山村誌』　東祖谷山村誌編集委員会　P752		新仏	新仏の墓の上	ヒダナ（ミズダナ）		13日新仏の墓の上にヒダナを作って、畑物などを供えておく。
	10	徳島県三好郡東祖谷山村誌編集委員会』編 1978　『東祖谷山村誌』　東祖谷山村誌編集委員会　P753	深渕			シバフネ		14日は親類の者が集って筏を作る。その上にはシバを敷いて、その上で108束の松明を焚く。シブハネの上には、戒名を書いたお札や瓜、団子などを供えて川に流すと言う。
三野町	11	三野町誌編集委員会編 1974　『三野町誌』　三野町役場　P389			仏壇	仏壇		そうめん・団子・茄子・胡瓜等を並べてまつる。寺から僧侶が盆行に来る。
				新仏	墓		今年竹で編んだすと肥松49束	新仏のある家は、墓地へ行って、樒と里芋の葉に茄子・里芋・米などのせたのを墓に供え、今年竹で編んだすの上で、こえ松をたき仏を迎える。こえ松は細く割ったのを、49束持参する。
三加茂町	12	三加茂町史編纂委員会編　1973　『三加茂町史』　三加茂町 P1416			仏壇	仏壇		そうめん・団子・茄子・胡瓜等を並べてまつる。
				新仏	墓		今年竹で編んだすと肥松49束	新仏のある家は、墓地へ行って、樒と里芋の葉に茄子・里芋・米などのせたのを墓に供え、今年竹で編んだすの上で、こえ松をたき仏を迎える。こえ松は細く割ったのを、49束持参する。
美馬町	13	美馬町史編集委員会編 1989　『美馬町史』　美馬町　P1207		祖先の霊	仏壇	仏壇		家の仏壇にもお供物を祀り、祖先の霊を慰める。
				新仏	墓		今年竹ですをあんだ上に肥松	墓地へ行って、里芋の葉に茄子・里芋・米などをのせたのを墓に供え、今年竹で、すをあんだ上で、こえ松をたき、仏を迎える。
半田町	14	半田町誌出版委員会編 1981　『半田町誌下巻』　半田町誌出版委員会事務局　P1036		位牌	仏壇または床の間に移した位牌の前		苧ガラをわたしかけぞうめん	仏壇または床の間に位牌を安置する。その前に団子・果物などを供え、上の方にオガラ（麻皮をむいたカラ）を渡し、掛そうめん（生そうめん＝昔は盆のお供え用に軟らかいそうめんを売っていた）になすを吊す。最近はそうめんを糸で吊す。
				餓鬼仏	庭先	水棚	丸竹の片端を傘の骨を逆にしたように割り、編んで棚にする。	里芋の葉をのせ、茄子・芋・米・団子などをのせてまつる。この前で火を焚き水棚に水をかけて拝む。

				新仏	川岸もしくは庭先	水棚		13日に川岸へ水棚をつくる。川に遠い山分では庭先に水棚をつくる。棚の上へ里芋の葉を敷き、米・団子・果物・茄子などをお供えする。山分では甘酒やドブ酒などを祀った。14日に棚経を家の祭壇で坊さんにあげてもらい、供養したお供物を持ってきて水棚に供えるのである。その前でオガラを燃やして火を焚く。新仏はその火の光で人の顔が見えるといわれている。水棚は火とぼしがすむと川へ押し流す習慣がある。
一宇村	15	一宇村史編纂委員会編 1972 『一宇村史』 一宇村役場 P1450		新仏	門先	水棚		水棚には、水と濁酒（麦でつくった地酒、最近は甘酒が多い）と洗米を供え、旧盆の14日の「火とぼし」（百八燈のことで燈篭の火とぼしと区別する）までおまつりする。３年間水棚をつくって仏をまつる部落もある。
				谷貞之丞の霊と新仏	お堂（門先・谷端）		竹の格子に麦からと肥松の束108本	14日の夕方、氏子がそれぞれのお堂に集まり、新仏に念仏をあげる。死者のあった家の人はお供物を配って礼をする。この行事には竹を格子に編んだ骨に、麦桿の小切れに肥え松を小割にしたものを入れて小束を108個つくり編みつける。その中で一段と高く突き出たものをつくっておく。これは藩政の誅求から死をもって一宇村の住民を救った、谷貞之丞の霊に供えるためのもので、燈篭立てに集まる人達と同様な人達が集まって、それぞれ火をつけてとぼし、水棚にお水をあげて新仏と共に悪人をも供養する行事
貞光町	16	徳島県美馬郡貞光町史編纂委員会編 1965 『貞光町史』 徳島県美馬郡貞光町役場 P1428			仏壇	仏壇		そうめん、団子、最近は菓子、果物などを供えている。
				新仏	谷のほとり・飲料水のでるところ	水棚	新竹で四本の柱（長さ１m程度）を立て、50cm位の高さに割った竹を並べて棚を作り、柱の上に樒を立てておく	13日に「水棚」というものを作っておく。14日には親戚、近隣の者が集まって、新仏の位牌（別に祭壇を設ける）の前で念仏をあげ、それがすむと一同そろって水棚へに行き、里芋の大きな葉の上に茄子、里芋の切ったものと甘酒、洗米を供え、終わると水棚の近くで「おがら（楮）」と「麦がら」を積んで火をつけ燃やすのである。夕方になると親類は墓地に詣り、初盆の行事はおわる。
脇町	17	脇町史編集委員会編 1994 『脇町史別巻』 脇町 P502	上野西		仏前			切り昆布に油揚を煮込んだのをお供えして拝む。
				新仏	墓地または庭先		平たい石３枚の上に肥松	里芋の葉の上にナスを賽の目に切ったものと洗い米を混ぜたものをお供えし、平たい石を3枚置いた上で肥松を焚きながら、精霊をお迎えして供養をする。

穴吹町	18	穴吹町誌編さん委員会編 1987 『穴吹町誌』 穴吹町 P1182から1183			仏壇			仏壇には芋殻とそうめん・なす・瓜などを祭り迎え団子を供える。
	19	穴吹町誌編さん委員会編 1987 『穴吹町誌』 穴吹町 P1182から1183	三島		庭先	水棚	竹３本を組んで前に平石を置く。	里芋の葉の上に芋・なす・米などを供えて祭る。その前に平石を置いて肥松をたきひとりひとりが水棚に水をかけて拝む。
	20	穴吹町誌編さん委員会編 1987 『穴吹町誌』 穴吹町 P1182から1183	古宮・口山	新仏	庭先に１組墓地に１組	精霊棚（盆棚）	青竹	七夕の日から準備をし、14日の早朝親類縁者が集まり、精霊棚（盆棚ともいう）に位牌を移し供物をした後、束ねた松・芋殻を屋形に組んだ青竹の下でたく。その火勢で青竹がパンパンと破裂する。この音が大きいほど精霊に届くのでよいといわれる。
木屋平村	21	木屋平村史編集委員会編 1996 『改訂 木屋平村史』 木屋平村 P1003		精霊	仏壇	仏壇		13日の夕方から精霊を迎えて14・15の両日仏壇でまつる。
				新仏	縁側（写真からの判断）		青竹の棚	新仏のある家は３年間盆の14日に「火とぼし」という行事を行い親類を呼んで供養をする。「火とぼし」とは肥え松を細く割り、それにハギと麦わらを少量ずつ束ねたものを108束つくって燃やし、供物は青竹の棚にまつり念仏を唱え供養する。燃えるとき青竹の大きな音が出るのが良いとされている。
美郷村	22	美郷村史編纂委員会編 1969 『美郷村史』 美郷村 P632		ガキ仏		水棚	竹	13日は、ガキ仏を供養するため竹で水棚をつくり里芋の葉の上にだんごとなすびをいれてそなえ、14日には「こえまつ」をたいて供養する。
山川町	23	山川町史編集委員会編 1987 『改訂山川町史』 改訂山川町史刊行会 P915			仏壇			仏壇飾りをねんごろにして、多くはだんご・菓子・夏野菜・素麺などくさぐさのものを供える。
				精霊		精霊棚		真言宗の家では精霊棚を設けて供えものをし、夕方竹の先に肥松の細束を作って火をともし、精霊を供養する。
阿波町	24	阿波町史編纂委員会編 1979 『阿波町史』 徳島県阿波郡阿波町 P1320		精霊	庭先		桑の木３本を組み合わせたもの	庭の場合は、桑の木30cmのものを三本組み合わせ、その上に里芋の葉を置き、水を供え、家族一同肥松に火をつけ、精霊を招じ入れ米団子や五目寿司、素麺（束のまま）供え供養した。家族はそのおすそ分けをいただいた。
市場町	25	市場町史編纂委員会編 1996 『市場町史』 市場町 p1368		新仏		精霊棚		新仏のある家では精霊棚を作り、茶菓・果物をお供えする。
川島町	26	川島町史編集委員会編 1982 『川島町史下巻』 川島町史 P566			庭先	精霊棚		庭先には精霊棚を造り、蓮の葉を敷いて菓子団子など供え、松明（肥松）をたき「迎い火」といって仏を招き供養をする。お寺から僧侶がきてお経をあげる。これを棚行という。

土成町史	27	徳島県板野郡土成町史編纂委員会編　1975『土成町史下巻』　土成町史編纂室　P494			仏壇	仏壇		14、15、16日の三日をお盆といい仏祭を行う。近親が供物をもって参拝する。夕方、墓または庭先で松明をたく。僧侶は棚経といって各戸の仏壇で読経する。
吉野町	28	吉野町史編纂事務局編 1977・1978　『吉野町史』　吉野町史編纂事務局						
鴨島町	29	鴨島町誌　鴨島町教育委員会編　1964年　鴨島町教育委員会 P1181			仏壇			茄子・瓜・果物を蓮の葉の上に盛って供え、仏具はよく磨いて、迎団子、（終ったときには送り団子）を祀る。
					戸外	施餓鬼棚・精霊棚		戸外には施餓鬼棚を設けて、菓子・米・団子を蓮葉に盛って祀る。15日前後には檀那寺の僧が、各家を廻ってお経をあげる。これを棚経という。精霊棚の前であげて貰うからである。盆が終わると、棚のお供え物を藁船にのせ、盆燈籠に火をつけて川に流した。
神山町	30	高橋丹兵衛編　1958『阿野村誌』　河内義計	阿川・広野					
	31	鬼篭野村誌編集委員会編　1995　『鬼篭野村誌』』　鬼篭野村誌編集委員会　P522	鬼籠野		仏壇	仏壇		仏壇を掃除し位牌の扉を開ける。迎え団子・季節の果物・菓子・素麺などを祀る。新仏のある家では、棚経と言って旦那寺より僧侶がきて読経し供養する。
	32	名西郡神領村誌編集委員会編　1960　『神領村誌』　名西郡神領村誌編集委員会　P732	神領					13日盆、迎えだんご、迎え火。14日朝夕仏まつり、踊り。15日盆送りだんご。
	33	下分上山村誌編集委員会編　1961　『下分上山村誌』　下分上山村誌編集委員会　P400	下分					盆踊り
	34	上分上山村誌編集委員会編　1978　『上分上山村誌』　上分上山村誌編集委員会　P529	上分					13日から15日盆。14日火とぼし。
上板町	35	上板町史編纂委員会編 1985　『上板町史・下巻』　上板町史編残委員会・事務局　P1330			仏壇			米の粉のだんごや瓜、野菜などを蓮の葉の上にのせてまつる。14日には檀那寺の住職が読経にまわってくる。これを棚経といった。
					庭先	水棚		
石井町	36	浦庄村史編纂委員会編 1965　『浦庄村史』　浦庄村史出版委員会 P566			仏壇		苧ガラ・ハスの葉	仏壇をかざり苧殻を立て蓮の葉に載せて団子を供え、僧侶は棚経と称して家々を廻り読経を行う。
				先祖の霊	墓地・庭先		石	墓地または庭先で松明を石上で焚いて先祖の霊を供養する。

				餓鬼仏		餓鬼仏	竹３本と棒１本	餓鬼仏と称して竹３本と棒１本で棚を作り、その上に蓮葉を敷いて団子となすを賽の目に切たものを供える。
	37	石井町史下巻　石井町史編纂会編　1991年　徳島県名西郡石井町　P904		祖霊	床の間		苧殻の門	床の間には、祭壇を作り仏壇の位牌を全部出して並べ、苧殻の門をつくり、十八豆・茄子・かんぴょうなど、吊り下げて供え、蓮の葉でご馳走を祀る。
				祖霊	庭先	精霊棚	とがり棒１本、竹笹３本の４本柱で笹の枝を目通しの高さで四角に組む	13日には庭先に精霊棚を作る。蓮の葉に団子をのせて供え、祖霊を招き僧の棚経で供養する。
				無縁仏	庭先	精霊棚		火を焚く時、１本を少し離れた所で立て、無縁仏の施餓鬼をする。この火を焚きながら、洗米と茄子の角切りを混ぜ合わせて水棚にまつり、水をかけて供養する。その棚の露を受けると、あせもが消えるといい伝えられている。
				新仏	庭先	水棚		前年の盆以後に死者の出た家庭は、初盆といって水棚を別に１ヵ所建て、親類が迎え火を焚きにくる。
徳島市	38	徳島市史編さん室編　1993『徳島市史第四巻』　徳島市教育委員会　P1063		先祖	仏壇前		仕出し・おがらばし	13日から仏壇の前に仕出しをこしらえ、位牌を飾り、先祖祭りをする。また別に浄め座を設け蓮の葉を敷き、麻柯・（おがらばし）にお膳、供物を供える。。供物は素麺、瓜、西瓜、団子などである。旦那寺から棚経に来る。
					庭先	精霊棚	竹に棚を結ぶ	庭先に精霊棚といって竹に棚を結び、この棚にも瓜、茄子、梨子の類を供える。その下で迎え火、送り火をたく。
				餓鬼	寺院	施餓鬼棚	1.5mの所に1.2m四方の棚・旗を5本たてる	盆の間寺院では施餓鬼棚を設け、毎日読経する。
佐那河内村	39	佐那河内村村史編集委員会編　1967　『佐那河内村史』　徳島県名東郡佐那河内村役場　P1130			家の庭	精霊棚		13日墓参に行き墓を掃除し、香花を供え家の庭に精霊棚を立てる。
板野町	40	板野町史編集委員会編　1972　『板野町史』　板野町役場　P1394		祖霊	仏壇			仏具・仏壇を入念に清掃し、13日の夕方火を焚いて祖霊を迎える。
藍住町	41	藍住町町役場編　初1965・　復1987　『増補　藍住町史』　藍住町役場　P682			仏壇		苧ガラ	仏壇の供え物は、仏器・仏膳には特に蓮の葉を敷いて、これに盛って供える。なお、真言宗では麻殻に懸素麺をかけ、供物を供え、またお茶湯といって椀に温湯を盛って供える。
					屋外	精霊棚（水棚）		屋外には精霊棚（水棚）を作って供物を供える

鳴門市	42	鳴門市史編纂委員会編 上1976・ 中1982・ 下1988 『鳴門市史 上 中 下』 鳴門市						
北島町	43	北島町史編纂委員会編 1975 『北島町史』 徳島県板野郡北島町 P1531			仏壇	仏壇		戦前の民間年中行事（大正十年〔1921〕記録）そうめん・団子等の供物を供える。
				餓鬼仏（無縁仏）	軒	精霊棚	一年竹	戦前の民間年中行事（大正十年〔1921〕記録）精霊棚は一年竹を以て作り、家々の軒につるし、そうめん・団子等家の仏壇に供えると同様の供物をなし、僧侶は戸毎に立て之を拝し、十六日に至て之れを川に流す。其の意は餓鬼仏（無縁仏）を饗応すとなり。
松茂町	44	徳島県板野郡松茂町誌編纂委員会編 1976 『松茂町誌 下巻』 松茂町誌編纂室 P171			かど庭	精霊棚（水棚・魂棚）		各家では精霊棚（水棚・魂棚）を作ってかど庭に立て、水・花を供える。僧侶は棚経といって水棚の前で読経して回った。13日は墓掃除をし、夕方墓地や水棚の前で迎え火をたく家もあった。
小松島市	45	小松島史編纂委員会編 上1974・中1981・下1988 『小松島市史 上・中・下巻』 徳島県小松島市役所						
羽ノ浦町	46	羽ノ浦町誌編さん委員会編 1995 『羽ノ浦町誌民俗編』 羽ノ浦町 P580		先祖	床の間		弘法大師、十三仏、不動明王の掛軸を掛け、普段は厨子に入れてある先祖の位牌を全部出して並べる。いずれの場合も上部にオガラ（麻幹-麻の皮をはいだ茎）を横に渡して、ホオズキ、素めん、茄子、ブドウなどを糸で一対にして掛ける。	供え物は御霊供（本膳仕立てでご飯、汁、皿、オヒラ、オツボに精進料理を盛りつける）を二つと（弘法大師の分とご先祖の分）、ほかにお華足にこんもり盛った団子、素麺、果物（ブドウ、梨、瓜など）、蓮の葉の形をした菓子などを供えた。
					カドサキ（家の門を入ったところ）	水棚	約１ｍの女竹を４本立て、さらに１本の男竹を四つに割って基盤状に組んで、棚を作っていた	13日の朝水棚（家によって若干違いがある）を作り、乾燥させた蓮の葉を敷き、庭先に立てた。盆の期間中の水棚や墓の供え物には、団子とミズノモト（ナス、十八豆、ヒイ菜を細かく刻んで洗い米を混ぜた物）が用いられる。
	47	羽ノ浦町誌編さん委員会編 1995 『羽ノ浦町誌民俗編』 羽ノ浦町 P581	宮倉	先祖・日天・月天		水棚	約１ｍの竹の先を20cm前後縦に割って上部を広げ、その上に蓮の葉をおく。	棚の前に３ヵ所（日天さん、月天さん、ご先祖さん）の線香立てを準備しておく。なお、線香はこのほかイズミ（井戸）、門、便所にも立て、最後に仏壇に立てる。

羽ノ浦町	48	羽ノ浦町誌編さん委員会編　1995　『羽ノ浦町誌民俗編』　羽ノ浦町　P582	古毛１	新仏		水棚		新仏さんがあると（その年に亡くなった人があると）二つ作っていた。
	49	羽ノ浦町誌編さん委員会編　1995　『羽ノ浦町誌民俗編』　羽ノ浦町　P582	古毛２		仏壇	仏壇		仏壇にはお霊供、お団子、菓子、果物などを供えた。
						水棚	竹を割って上部を開き、その上に蓮の葉をおく	シキミを供えた。夕方、ミズノモトを蓮の葉の上に載せて供え、水を掛けた。
	50	羽ノ浦町誌編さん委員会編　1995　『羽ノ浦町誌民俗編』　羽ノ浦町　P582	古庄	無縁仏		施餓鬼棚（水棚）	約一メートルの女竹四本を立て、横木として約三十センチメートルの割竹を数本渡した。	13日朝のうちに棚を作った。棚の上に蓮の葉を敷き、ミズノモト、団子２、３個を供えた。
	51	羽ノ浦町誌編さん委員会編　1995　『羽ノ浦町誌民俗編』　羽ノ浦町　P583		餓鬼仏（無縁仏）				14日仏壇にお茶を供えることを「お茶とう」というが、この日は21回行う。このお茶は捨てずに残しておき、まとめて家の近くの辻などに流した。これは餓鬼仏さん（無縁仏）にあげるのだといわれていた。
那賀川町	52	那賀川町史編さん委員会編　2002　『那賀川町史下巻』　徳島県那賀郡那賀川町　P785	江野島１	先祖	仏壇		オガラを渡し、素麺、ホウズキ、ササゲ豆をつりさげる。	
	53	那賀川町史編さん委員会編　2002　『那賀川町史下巻』　徳島県那賀郡那賀川町　P787	江野島２	先祖	床の間			仏壇から位牌を出し床の間に古い順に並べた。位牌の前に果物や饅頭を供える。
	54	那賀川町史編さん委員会編　2002　『那賀川町史下巻』　徳島県那賀郡那賀川町　P787	江野島３	先祖	床の間		十三仏の掛け軸を掛け、位牌を並べる。その前にオガラを渡し、ナス、キュウリ、ホウズキ、豆などをつるす。	床の間に位牌を全部出してきて並べる。その前に供物をする。
				新仏	庭		竹３本を組んだものの上部にハスの葉を置く。	初盆の時だけ新仏のための棚をつくる。13日に設置し、14日の朝早く棚参りに行き団子と、ナス、キュウリ、ニンジンを賽の目に切ったミズノモトという供えものをし、棚の前で火を焚いた。この行事をムカワレといった。
	55	那賀川町史編さん委員会編　2002　『那賀川町史下巻』　徳島県那賀郡那賀川町　ｐ787	中島	先祖	仏壇		オガラを渡し、素麺、ホオズキ、薄い菓子、ササゲ豆をつりさげる。	仏壇奥に先祖の位牌を全部並べる。仏壇前に供物をつるす。

		から788		先祖	庭		メダケ４本をたてて、上部をまげ、ハスの葉をしいた棚	14日の朝までに棚をつくり、棚の下で火をたいたあと、ナスを細かく刻んだもの、米、水を混ぜたものを棚に供える。
				新仏	庭		メダケ４本をたてて、上部をまげ、ハスの葉をしいた棚。初盆は６蓮、２年目は３蓮、３年目は１蓮	初盆の時は新仏のために棚を６蓮にしたものをつくり、14日の昼過ぎに親戚一同が集まって、棚の下で火をたく。昼過ぎに火をたくのは新仏は一番の後輩なので遅れてくるためといった。２年目の盆は棚を3蓮にしたものをつくり、３年目の盆は棚を１つを別につくる。
				無縁仏				14日真言宗の家では「御大師さんに」と21回お茶を入れて仏壇前にお供えをした。供えたお茶は小桶にとっておき、21回のお供えがすむととっておいたお茶を家の前の辻に持っていって「無縁仏さんに施餓鬼」といってまいた。
勝浦町	56	勝浦郡教育委員会『勝浦郡志』 1972 名著出版						
上勝町	57	上勝町誌編纂委員会編『上勝町誌』 1979 上勝町誌編纂委員会 P1010		先祖	仏壇			13日に家の仏壇に先祖代々の位牌をきれいに洗って飾り供えものをする。別に精霊棚を設ける。
				先祖	家の石垣か庭先	精霊棚（盆棚）	青竹を立て割竹で編んだ棚でその各隅々に榕の小枝をまつる。	盆の13日につくり、棚の上に里芋の葉かばしょうの葉を敷き、小さくきざんだ茄子と米だんごを供える。里芋は葉つきのまま供える家もある。竹は今年竹を使う。
阿南市	58	阿南市史編纂委員会編 1987 1995 2001 『阿南市史 第一巻・第二巻・第三巻』 阿南市教育委員会事務局						
鷲敷町	59	徳島県那賀郡鷲敷町町史編纂委員会編 1981 『鷲敷町史』 徳島県那賀郡鷲敷町 P651			各戸	水棚		大正時代の年中行事。７月14日墓参りし、墓前で火をたき、各戸水棚を作った。
				餓鬼	川	立施餓鬼水棚		大正時代の年中行事。新仏のある家は川にも立施我鬼水棚を作った。
相生町	60	相生町誌編纂委員会編 1973 『相生町誌』 徳島県那賀郡相生町役場 P1722		先祖		精霊棚		ばしょうの葉を敷き、仏壇から先祖代々の位牌を出して水洗いして、立て並べる。14日朝早く精霊棚に灯明を上げ、香を焚き、門先で家によっては墓地または「おふなとはん」の前で火ぐしにまつを差し火をともす。それから家族全員打揃って墓参に行く。途中会う人ごとに「けっこうなぼにでおめでとうございます。夏はいろいろお世話になりました」など挨拶する。精霊棚や仏壇には21回「お茶とう」（お茶をまつる）をする。檀那寺からは檀家へ棚経に回る。

				大師と新仏と餓鬼仏	川原	水棚	女竹でつくる。	磧に女竹でつくってある水棚に、だんご、素麺、菓子、樒、水萩を供え灯明をあげる。水棚の中は3つに区切り右は大師、左は餓鬼仏、中央には新仏の位牌をまつる。棚の前に親戚、株内の者が集まり念仏を唱え、108個の小石を並べて輪を作ったその中で松を焚き、水際に数個の平たい石を積み重ね、五輪塔のようなものをこしらえる。
木沢村	61	木沢村教育委員会編 1988 『木沢村の民俗』 木沢村教育委員会 P15		先祖	床の間（仏壇）		仏描の掛軸をかける	13日には先祖代々の位牌を水で洗ってから、床の間に仏画の掛軸を掛けてその前に先祖の位牌を立てて並べ（仏壇で祭るところもある）、お霊具、お茶、果物、茄子、里芋、等を供え、樒一対、燈明台、香盤をおく。
			岩倉・大用知	先祖				特別の棚。特別に棚を作ってお祭りをするところもある（岩倉・大用知）。
				新仏	川原			新仏のある家は、3年間8月14日に川原等に棚を作り位牌を載せ火とぼしを行い、講組、株中、親戚をよんで念仏をあげ供養をする。
	62	木沢村誌編纂委員会編 1976 『木沢村誌』 徳島県那賀郡木沢村 P1745		先祖	床の間		仏画の掛け軸3本をかける	十三日夕方に先祖代々の位牌を水で洗ってから、床の間に仏画の掛軸を三本掛けてその前に位牌を立てて並べ、その前には団子・ご飯・油揚げ・昆布・里芋・菓子等をお供えし樒一対・線香台等もおく。
				新仏	川原	精霊棚		新仏のある家は3年間8月14日に火とぼしを行い、講組・親戚を呼んで念仏をあげ供養する。火とぼしは槇の木・肥え松・かじがらを細く割り21束をこしらへ川原に作った精霊棚に位牌と共にのせて点火し念仏を唱えるのである。
上那賀町	63	上那賀町誌編纂委員会編 1982 『上那賀町誌』 徳島県那賀郡上那賀町 P2124		仏	軒先	水棚	芭蕉の葉を敷き、里芋・茄子・とうもろこし・ほおずき等を供える。	芭蕉の葉を敷き、里芋・茄子・とうもろこし・ほおずき等を供える。仏壇の位牌も全部谷川へ持って行って洗い清めていた。こうして迎え火を焚きいよいよ仏を迎える。
木頭村	64	徳島県那賀郡木頭村編 1961 『木頭村誌』 徳島県那賀郡木頭村 P1088				盆棚		盆は13日から始まる。盆棚を作り、その前に畠の芋・穂草・黍等を縄でつるし、盆団子を20ー30個供える。それでヒョウヤク（冗談）に、死んだらボンダンゴになるという。
				仏	外縁	仏殿		外縁のある家は仏さんをそこに出して仏殿を作り16日迄まつる。
				ガキドウ（餓鬼道）				家の盆棚とは別に水を入れた器を置き、ハナシバ（シキビ）を添えて置く。この水はハナシバで御供物にふりかける。

				新仏		川原	石で高い壇を作り、上に砂を敷き竹の束を置いて城を作りカナバ（松明のこと）をその上でたく。	14日は、ミズマツリまたはボンムカエと呼んで、盆の朝早く川原へ行き、死んだ人が三年たたないときは、石で高い壇を作り、上に砂を敷き竹の束を置いて城を作りカナバ（松明のこと）をその上でたく。これが仏様を向える方法であり、この時川で里芋を洗って帰り家のショウリョウダナに供える。
由岐町	65	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 由岐町教育委員会 P67	伊座利	精霊		精霊棚		お盆の行事として精霊棚を作り、精霊を迎えるしきたりがあったが昭和20年ころから自然消滅している。
	66	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 由岐町教育委員会 P252	志和岐	仏	仏壇	仏の面匿し	女竹の１年ものを２本仏壇の前につるし着物をかける	盆の13日、各家とも女竹の１年ものを２本仏壇の前につるし、着物をかけた。これは盆に仏が家に帰ると伝えられ、仏に顔を見られるのが恥ずかしいので着物で仏の顔を隠した。この習慣は大正の初期に、荘厳寺の住職村田覚英師が棚経の妨げになると除けた時から廃止となった。
				新仏	浜辺		１年の女竹を利用して霊が昇る段を作る。	新仏のある家庭では３年間、浜辺で精霊棚を作る。供物をし、盆用のしめなわ（五・五・三に縄のはしを出す）をつくり「しきみ」の葉をさす。14日早朝家族そろって墓と精霊棚に詣る。洗米、なすを小さく切ったもの、賽銭・線香を墓に供えた。なお、墓地で「オガラ」と松の木を束ねたものを炊いて先祖を供養した。
	67	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 P355	東由岐	仏	仏壇			13日、盂蘭盆。家々で仏壇をかざり、団子、菓子、果物などを供えて仏をまつる。15日午後仏前に供えた物を海へ流す。
	68	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 由岐町教育委員会 P462	西の地	先祖	床の間	床の間		お床に位牌をまつり、山海の品々を供える。「かわらげ柴」の葉に、「かぼちゃ」、「あらめ」、「おあげ」その他を入れて祀る。
	69	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 由岐町教育委員会 P664	田井		庭先	お精霊棚		14日の朝、村中の人がそれぞれ先祖の墓参りをして、お精霊を家に迎え、前日に庭先に作ったお精霊棚に枝豆、茄子、瓜、根芋をまつりお茶湯を供える。
	70	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 由岐町教育委員会 P807	木岐（農家）	無縁仏		施餓鬼棚		施餓鬼棚を作り無縁仏の供養をする。
	71	由岐町史編纂委員会編 1985 『由岐町史・上巻（地域編）』 由岐町教育委員会 P810	木岐（漁家）	仏	戸口	精霊棚	箱型の棚	昔は精霊棚といって仏様を祭る箱形の棚を戸口にこしらえたものだったが現在はない。

日和佐町	72	日和佐町史編纂委員会編　1984　『日和佐町史』　徳島県海部郡日和佐町　P1240		精霊	仏壇			13日、早めに飾り付け、供物をまつり、精霊の帰りをまつ。
						精霊棚	木製の箱型。街方には棚式のものがある。	精霊とは、霊魂をいい、これをまつるものを精霊棚という。飾り付けは、苧殻（一年生の女竹の代用が多い）を左右に渡し、これに掛けそうめん・ふろう豆（ささげ豆・あずき豆の代用の家もある）・里芋などを掛けるかまたは、つるす。供物は団子やまんじゅう・なす・南瓜・油揚げ・切りこんぶ・かんぴょう・椎茸・凍豆腐などを入れた煮物を里芋の葉にのせてその上に供えるのが一般的であった。
				無縁仏	川原	施餓鬼棚		死亡してから三年間（盆がすんでから死亡した場合は二年間）盆の十三日に川原などへ無縁仏供養の施餓鬼棚をこしらえたが、これも近時やめる家が多くなっている。
		日和佐町史編纂委員会編　1984　『日和佐町史』　徳島県海部郡日和佐町　P1239	西河内	無縁仏	寺	施餓鬼棚		西河内の西川寺では、外庭に施餓鬼棚をこしらえ、薬王寺から僧侶を招いて、西河内一円の人が集まり供養をしていたが、昭和38年２月11日西川寺が火災で焼失してからは、中止されている。
牟岐町	73	牟岐町史編纂委員会編　1976　『牟岐町史』　牟岐町　P1078		仏	仏壇			家では仏壇をかざり迎え団子を供え、夕方には家族の者が手桶水・線香を持って墓参して帰る。これを仏迎えといっている。農家では庭で肥松やオガラを焚いて先祖の霊を迎え、茄子を賽の目に切った物や、素麺・高野豆腐を御霊貢諸にまつる。14日、各戸へ檀那寺から住職が来て、仏壇で読経をしてくれる。
海南町	74	海南町史編さん委員会編　1995『海南町史下巻』　徳島県海部郡海南町　P158		先祖	床の間			七夕さんが終る頃から各家ではお墓の掃除を丁寧に行う。また、仏壇の掃除をし、位牌を出して床の間にまつる。
	75	海南町史編さん委員会編　1995『海南町史下巻』　徳島県海部郡海南町　P158から159	川上		仏壇	仏さんの顔かくし	竹・トウモロコシの葉をあんだもの	仏さんの前へトウモロコシの葉を編んで竹につるしたものをする。川上では先祖の位牌を出して川の清流で洗って乾かしてまつる地域もある。仏壇には御霊供（仏にお供えする料理で、ご飯・おつゆ・おかず等）やだんごを供え、ローソク・線香を立てて拝む。
				無縁仏	川原		川石	川上では川原に川石を立て無縁仏の供養をする。
	76	海南町史編さん委員会編　1995『海南町史下巻』　徳島県海部郡海南町　P159	浅川		家の入り口	招霊棚または小乗棚		供物（ソーメン・サヤマメ・イモ・ナス）を供え、その下にバケツ等に砂をを入れシキミを立てる。十三日の夕方は線香を立て招霊する。

	77	海南町史編さん委員会編　1995『海南町史　下巻』　徳島県海部郡海南町　　P159	浅川（鯖瀬）	三界万霊	川端・海岸		川端には川石、海岸には青竹とシュロの葉でつくる。	8月14日に三界万霊供養（川端供養・海洋供養）を行う所がある。これはお盆初日の墓参のおり、川端へ川石二個で碑を立てる。その前へ青竹の花立てと線香立てを並べ、花（主としてシキミ・ミズヒキノハナ）と線香と供物（お米とナス・ナンキン・ナガマメを細かく刻んだ混ぜたもの）をあげる。これが川端供養で、海洋供養はシンダンのあった家で海岸に青竹とシュロの葉で作った祭壇に、供物（川端供養と同じもの）をまつり沖に向かって念仏を唱える。
海部町	78	徳島県海部郡海部町教育委員会編　1971『海部町史』　徳島県海部郡海部町教育委員会　P505		先祖	仏壇			先祖代々の位牌をきれいに洗って飾る。13日の夕方、精霊を迎える墓参をし、盆マツ（松の木をうすくけずって束にしたもの）をたいて迎え火とし、こまかくさいころに切った茄子と洗い米を供える。14日にいろいろと供物をする。21回お茶をかえて回向する。
						精霊棚		仏壇とは別に設ける。13日の夕方、精霊を迎える墓参をし、盆マツ（松の木をうすくけずって束にしたもの）をたいて迎え火とし、こまかくさいころに切った茄子と洗い米を供える。14日にいろいろと供物をする。21回お茶をかえて回向する。
宍喰町	79	宍喰町教育委員会編　1987　『宍喰町史　下巻』　宍喰町教育委員会　P1823						13日の夕方より14日の朝にかけて、墓参をして先祖の霊を迎え14、15日おまつりし、15日午後仏おくりの墓参をする。
				餓鬼	寺			大字においては各寺に集まり施餓鬼の行事を行う。